

異種素材の組み合わせによる工芸品開発事例

株式会社山王産業 ○山王博和
デザイン開発室 滝下隼人

1 はじめに

さつま工芸会は、平成4年度ハイテク研究会の一つとして発足した。会員は、鹿児島県の伝統的な工芸品や各種の素材を扱う企業の経営者及びその企業に属する技術者に呼びかけた異業種交流をメインとした会である。近年、この異業種交流という言葉は頻繁に使われているが、このさつま工芸会では、研修し、交流するだけでなく、技術の交流を通して異業種間で物を作り、そして販売まで行うことで、消費者に研究の成果を問うスタンスをとっている。

2 異業種間での技術的問題

異業種間で商品を開発する場合ネックになるのは、業種と業種間の技術力や企業体質、体制をお互いに知らないということである。1企業単独で商品を開発する場合、自社内の技術力がわかるため製品は出来やすいが、異業種間では精度の違いや技術力に差がみられ、製品開発は困難を窮めた。異業種間の技術力やその他の共通認識をもつために、企業間の研修視察等は、さつま工芸会のメンバー間だけでなく、他の技術者・デザイナーにも及んで連携を深めた。

当初、研修視察に重点をおいたことは、データ・図式化など目に見える形のものではなかったが、企業同士が相互に自己の技術力を見通し、技術の高度化と共創意識の高揚に大きな意識を持たせた。



図1 会議風景

3 製品開発の実際

月一回定例会（展示会前は、2～3回）を行い、異業種間でのアイデア交換、アドバイザーや工業技術センター職員による製品の提案などで、技術的な解決を図っている。その会議風景を図1に示す。

技術的な問題以外に情報の問題がある。「どういうデザインにするか」「何を作ればよいのか」「何を作れば売れるのか」といったことやPL法施行による法令等は、企業としてはなかなか得がたい情報である。そこで、情報源を工業技術センターに置き、会員企業に共通する情報等は、定例会で提示・交換し、企業が商品を開発する場合のデザインのアイデア抽出情報は、工業技術センターの協力で収集・加工してもらいながら、商品の開発にあたった。図2にそのフロー図を示す。

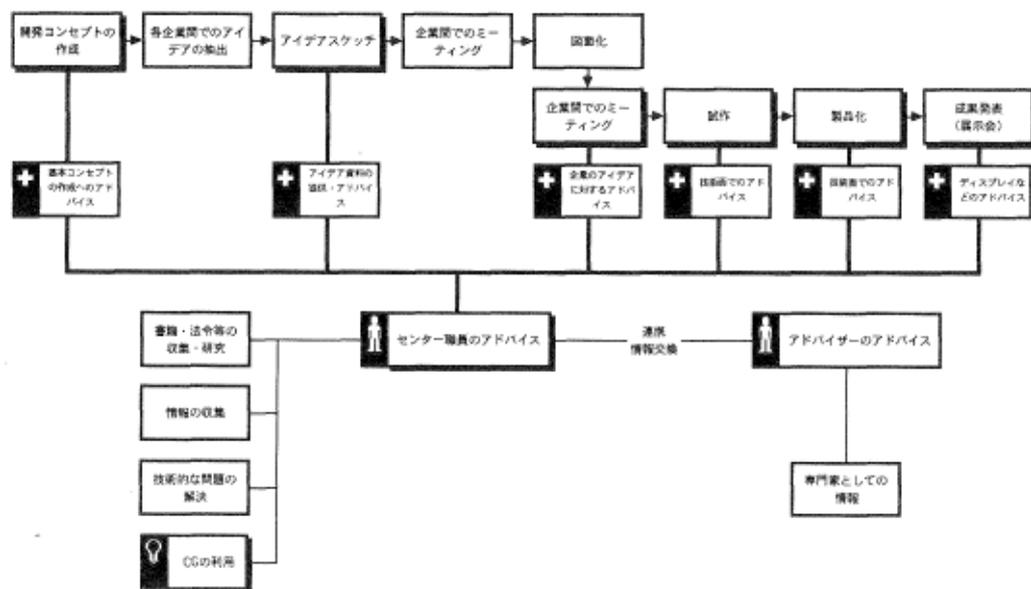


図2 さつま工芸会における異業種間の製品開発フロー図

4 異業種による商品開発事例

第1回デビュー展においては、異種素材の複合というのは各企業間でのアイデアスケッチや図面だけのもので、お互いのコミュニケーションがうまくできなかつたり、時間がかかったり、またイメージの違うものや本人の意図としないものなどができて何かと苦勞が多かった。

しかし、第2回デビュー展では、1回目の反省がうまく生かされ、ものづくりの時間が多くとれた。加えて、CG（コンピュータ・グラフィックス）を利用した工芸品開発も行われ、コンピュータを利用した新しい工芸品開発の可能性を見いだすことが出来た。今後は、コンピュータを積極的に利用し、商品の高品質化・生産の効率化を図っていききたい。CGを利用して研究開発した商品の一例を図3、4に示す。

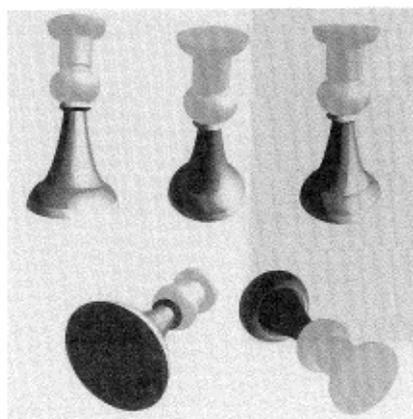


図3 キャンドルスタンド

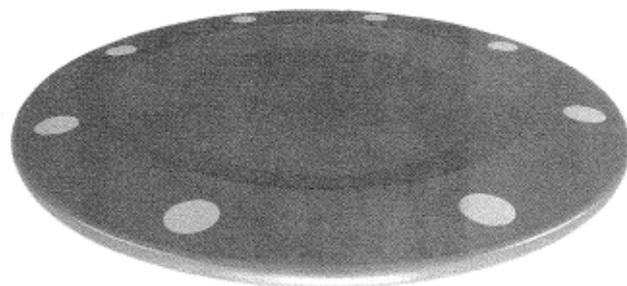


図4 チーズ皿

5 おわりに

伝統工芸品というのは、単に昔からある工芸品ではなく、その時代背景に合ったからこそ、残っているのだと考える。したがって、これから創出する工芸品は、時代の社会基盤や生産基盤、生産者のモノの価値基準をしっかりと見据えたものでなければならない。

今後、さつま工芸会は県内の様々な工芸素材を生かし、より時代にマッチした新しい工芸品づくりについて、技術と感性の再統合を図りながら取り組み続けていきたい。

最後に、この研究会を支援していただいた工業技術センターや技術アドバイザーのみなさんに感謝します。